

# 英語スピーチ指導の理論と実践

杉 浦 正 好

## 1. はじめに

中学生および高校生を対象としたスピーチの審査員を愛知県内の各地で長年つとめてきた。ほとんどが英語のスピーチであったが、中には外国人留学生の日本語スピーチの審査もあった。手元の記録によれば、1993年愛知県高等学校英語スピーチコンテスト西三河地区予選を手始めに、主に中学生と高校生を対象に80回以上審査をしてきた。審査の後には講評を依頼されることも多く、良い英語スピーチのあり方とその指導法について考える機会になった。

本稿は、末尾に挙げた文献も参考にしながら、これまでの講評を整理したものである。実際のスピーチの SCRIPT 全文を掲載し例示したいところであるが、本人はもちろんのこと、指導の教員や家族の同意が必要であるため、断片的な引用に留めた。

## 2. 新学習指導要領とスピーチ指導

英語によるスピーチ大会は減少傾向ではあったようだが、新学習指導要領が告示されてから再び脚光を浴びるようになってきた。4技能の1つである「話すこと」が2つの領域に分かれたからである。

2017年3月31日に小学校と中学校の新学習指導要領が告示され、小学校では2020年度から、中学校では2021年度から全面実施される予定である。注目すべきは英語の4技能の1つである「話すこと」が細分化されることである。中学校の指導目標はこれまでの「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能4領域であった

が、新指導要領では「話すこと」が「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」に分けられ、4技能5領域の目標として明記されている。4技能の1つの「話すこと」が「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」に分かれていることが主たる変更点と言えよう。

5領域の1つである「話すこと [やり取り]」は、相手との会話で言葉のキャッチボールがスムーズにできる能力を求めたものであろう。ボールを相手にただ単に投げるだけでなく、受けやすいボールを投げ、会話が継続できるようにすることが大切である。一方、本稿で扱うことにしている「話すこと [発表]」では、大勢の前で自分の考えや研究したことを分かりやすく伝える能力が求められる。長い時間かけて英語で発表できればよいというものではなく、相手に趣旨を理解させ、いかに心を動かすことができるかが成否の分かれ道となる。

新学習指導要領では、話すこと [発表] について具体的に以下の目標を挙げている。

- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。
- イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

以上の3つの目標を読んでもみると、本稿で扱う英語のスピーチは「即興で話すこと」ではないので、上記の目標の「イ」と「ウ」に該当すると思われる。

新学習指導要領の意図する目標達成のためには種々の提案がなされているが、本稿では「話すこと [発表]」の目標「イ」と「ウ」に絞って、どのような指導をしたらよいかを提案したい。前半では、スピーチの原稿の内容と作成方法を中心に、スピーチコンテストに出場する生徒の指導方法について述べ、後半では授業での英語発表を活性化するための1評価方法にも触れたい。

### 3. スピーチ原稿の作成に向けて

最初にスピーチ原稿について検討したい。即興ではなく、事前に準備するスピーチで重要なのは原稿であろう。その良し悪しでスピーチの成否は決まると言っても過言ではない。つまらない原稿であれば、練習すればするほどスピーチは改善されるどころか悪化さえしてしまう。それでは、どのような原稿が望ましいか考えてみよう。

#### 3.1 スピーチの構成

典型的な構成は Introduction・Body・Conclusion の3部構成である。その3部構成の基本を簡単にまとめてみよう。

##### (1) Introduction (導入)

何を話すか明示する。聞き手の注意を引くための工夫が必要であるので、冗談やエピソードから始めるなど常識にとらわれない出だしを考えてもよい。Have you ever seen “Yokai”? Where do you think they live? で始めたスピーチを覚えている。年齢の離れた自分の弟を紹介するための導入であったが、聴衆は思わず「妖怪？」に興味を抱かされた。

社交的なスピーチならば挨拶や自己紹介で始めるのもよいが、コンテストのスピーチでは筋書きでの必然性がなければ不要である。

##### (2) Body (本文)

要点を絞り、自分の経験やエピソードを具体的に加える。ここで実行可能性のある提案をするとよい。例を挙げるならば、外国でホームステイ中

に日本の事象について聞かれたが返答に窮してしまったとする。その経験を踏まえ、日本の歴史や文化についてもっと勉強しようと決めた。この窮した場面ではストーリー性のある描写をしたい。抽象論の羅列で終わらないようにすべきである。

##### (3) Conclusion (結論)

話したことをまとめて繰り返す。これまでの主張内容を言い換えて、一番言いたいことを念押しするのである。起承転結に基づく日本語のスピーチであれば、Introduction と Conclusion の主張が異なってもよいが、英語では Introduction の主張と齟齬があってはならない。

#### 3.2 スピーチの機能

スピーチは聞き手を魅了し、心を動かす機能を持つことが肝要である。聴衆が100人いるとしよう。1人がつまらないスピーチを12分間すれば、聴衆は合計20時間の貴重な時間を浪費させられることになってしまう。

心を動かすスピーチとは聞き手に行動させるスピーチでもある。英語では *inspiring* という語がふさわしいであろう。*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (第8版) は *inspiring* を次のように定義している。

*inspiring*: exciting and encouraging you to do or feel something

スピーチを聞いた人を行動に走らせる、あるいはその気にさせることである。行動は難しくても、賛同あるいは共鳴させることができれば成功である。その機能を満たす条件として次の3つが挙げられよう。

##### (1) touching/moving 感動

感動を与えるものである。一般の中学生や高校生は人生経験がまだ乏しく、生活範囲も狭いこともあり、話題がどうしても限られてくる。中高生のスピーチでよくあるのは、「部活動」「両親への感謝」「祖父母の思い出」などであり、どうしても感想に終始してしまう。ありきたりの事を話題にしても感動を呼ばない。偽りばかりの内容では困るが、自分が感動したことを少々大げさに述べ

て、聴衆の共感を得るようにしたい。

(2) informative 学び

聴衆に「なるほど!」と思わせることが大切である。換言すれば、内容に新鮮な情報が含まれることが不可欠である。

インドからのある留学生が、「日本人はインド人がだれでもカレーを食べていると思うでしょうが、実際には、カレーは限られた地域でしか伝統的な料理とされていません」と述べた。全ての日本人が寿司を好物にしているとは限らないのと同様に、一律に型にはめた人間観や人生観を戒める切り出しとして成功した。

講演では新聞などからの引用やデータを含めると説得力があるが、視覚資料が使えない5分後のスピーチでは数字の過剰な羅列は避けたい。

(3) enjoyable/entertaining 楽しく

日本人にとって難しいのがこの類いのスピーチである。聴衆から一斉に笑いが漏れ聞こえれば、審査員にも少なからず影響を与えよう。

外国人留学生の温泉体験記を聞いたことがある。生まれて初めて家族以外と一緒に風呂に入り、裸になり、恥ずかしく思ったことを面白おかしく伝えることで笑いを誘った。習慣の相違について考えさせるスピーチの1つになった。

スピーチコンテストにおける英語スピーチは以上に挙げた3つの条件の内、1つ以上満たす必要がある。

なお、パブリックスピーキングには表彰式などの儀式的なスピーチ (celebrating) も含まれるが、本稿が対象としているコンテスト向けのスピーチには該当しないので省略する。

### 3.3 原稿を書くためのガイドライン

原稿を作成する際に第一に念頭に置くべきことは、話し手はだれであるかである。中学生や高校生であれば、身の丈にあったスピーチが望まれる。教員が指導するのは当然のことであるが、生徒本人が書いたと思えないような内容では困る。例外もあるが、自分や身近な人などに関する内容であることが望ましい。身近なテーマから高尚な内容に発展させるのも一案である。

以下に挙げる10項目のガイドラインが草稿作

成のためのヒントになれば幸いである。

(1) 原稿を英語で書く?

原稿は生徒が最初から英語で書くのが理想である。その英文を指導する英語教員が添削し、英語母語話者に校正を依頼するのである。こうすることによって日本人英語教員も自分の英語を磨くことができる。

一般の生徒には荷が重ければ、最初の原稿は日本語でもよいだろう。それを日本人教員と英語母語話者が協力して英訳するのである。いずれにしても、生徒とじっくりと相談しながら進めることが重要である。生徒が自分の主張とは異なると思ひ始めたら、指導者も生徒にとっても良い結果は出ないであろう。

(2) 新しい情報を含む

一番つまらない内容は個人のつぶやきである。日記の記述や感想文の類いである。例を挙げれば、飼育しているペットの紹介のみで終わるような内容は自己満足に終わりかねない。そこから発展して、聴衆が自分も世話をしてみたいと思わせるならばその限りではない。

中学生は部活動の内容を紹介するスピーチも多い。これも練習や大会の紹介だけに終始すれば興味は半減である。例えば、バレーボールで優勝したことを話しても他人事に過ぎない。個人やチームとしての苦労話を紹介するだけでなく、聴衆が共感できるような工夫が必須である。さらに発展させて、学校や社会でも活かせるような内容を明示するとよいだろう。

(3) 主題は1つ

内容にあまり多くのことを論じるのは焦点がぼける恐れがある。論点は1つに絞る、具体例を挙げて発展させるならばよいだろう。最も避けたいのは、最初に賛成の意見を述べ、途中から反対の論旨を展開するスピーチである。あたかも客観的に思えても、本人の主張したいことがあいまいになってしまう。

(4) 具体的に書く

抽象論は高尚に聞こえるが、短いスピーチでは説得力がない。「世界を平和にしよう」と論じるスピーチもしばしば聞かれる。世界を平和にしよ

うとするのは誰もが思っていることであるが、peace と何度もスピーチの中で叫んでも「平和」は来ない。生徒でも実行できる小さな一步の提案があれば歓迎である。

#### (5) 説教はだめ

時には命令口調のスピーチがある。聴衆の多くは生徒であるが、大人の聴衆も含まれている。大人にとっては中学生や高校生に説教されたくない。生徒でもできる行動を紹介し、提案するならばよいであろう。

#### (6) ユーモアがあれば

スピーチは真面目なものとの誤解が日本人の多くにあるような気がする。少しオーバーにしてもよいから聴衆から歓声が沸き上がるようなエピソードを入れるとよいだろう。

某高校に留学生していた北欧の生徒の日本語スピーチを思い出す。その中で、日本のトイレについて、「和式トイレに入ると森の中にいるようです」と切り出した。ついでに、「シャワートイレですが、宇宙船にいるような気持ちになります」と続けた。少々オーバーではあるが、その挿話で聴衆は一気に盛り上がり、最後までしっかり聞くことになった。

#### (7) 聞き手に考えさせる工夫を

日常で何気なく友人と会話をしていると集中力が途切れることがある。その際に、質問をされるとハッとすることがある。スピーチでも同様である。審査員は緊張して耳を澄ませてはいるが、途中で集中力を欠くことがある。そこで疑問文を使われると我に返ることがある。例えば、Have you ever experienced working as a volunteer? や Do you know Ichiro Suzuki? と質問されれば、思わず答えを準備させられることになる。

#### (8) 会話を挿入する

スピーチは1人によるものであるが、会話を巧みに取り入れれば効果きめんである。日本の落語はそのような話術を駆使した芸と言ってよいだろう。その話芸の1つが1人で2役を担うことである。微妙に声色と仕草を変えることで別の人を演じるのである。巧みであれば、聴衆はそのような話術に知らず知らずの内にはまることになる。

#### (9) 思いがけないことを言う

聴衆の関心を引き起こす手立てとして、奇をてらった内容を含めることがある。一般的な常識を逸脱するような内容を入れるのである。例えば、I don't like 'Arashi' at all. Do you know why? とすれば、国民的なアイドルグループである「嵐」を敵に回すことになり、聴衆の注目を浴びることになる。ただし、無責任な放言で終えてはいけない。全くの嘘八百を並べるのはひんしゅくものであるが、主張を強調するためには少々誇張は許されるであろう。

#### (10) 繰り返す

重要な内容は繰り返すとよい。歌や詩で同じフレーズを使ったり、韻を踏んだりすることと同じである。歌をヒットさせるのは、適度な繰り返しと韻を踏むことが必須である。

1980年代に英国でサッチャー政権に抵抗した炭鉱労連の会長が、Thatcher is a butcher. (サッチャーは虐殺者である) と叫び、Coal or Dole? (石炭を取るか、失業手当を取るか) と政府と労働組合員に二者択一を迫っていたのが印象的であった。結局は敗北したが、韻を巧みに利用したフレーズが今でも筆者の耳に残っている。

あるスピーチで、The village around us, the people around us, they'll change, we'll change. Eventually the whole world will transform. という一節を耳にした。around us が2回、change が2回、そしてchange の言い換えのtransform が実に効果的であった。

## 4. デリバリー (話しぶり)

原稿が少々劣っていても、デリバリーで逆転することもある。かつてはジェスチャーとされていたが、音調も重視されるため、近年ではデリバリー (delivery) と呼ばれるようになった。Oxford Advanced Learner's Dictionary (第8版) はdelivery を次のように定義している。

delivery: the way in which somebody speaks, sings a song, etc. in public

近似の日本語としては、「(公的な場面での) 話しぶり」と訳せるだろう。

#### 4.1 強調する

スピーチには随所に内容の決め手となるキーワードが存在する。語や句を強調する際に、該当部分に対する音声・発音上のテクニックを次の例文で説明しよう。いずれも太字部分である **beautiful** を強調するとする。

I went to Okazaki Park. I saw a **beautiful** bird there.

##### (1) 大きな声で

最も簡単なのは、**beautiful** を強く発音する。唐突にならないように注意したい。

##### (2) ゆっくり言う

**beautiful** をゆっくり発音する。意外に知られていないが試す価値は十分ある。声も適度に大きくなり、失敗も少ない。

##### (3) 語の前にポーズを置く

これは非常に効果的である。ポーズがあると、聞き手は次にどのような言葉が来るか予測するようになる。ただし、下手をすると語句を失念したと思われるので注意したい。

##### (4) 小さな声で

少々勇気がいるが、小さな声で発音する。耳元でささやくのと同じ効果がある。聴衆が聴き取れない危険があるのであまり薦められない。

#### 4.2 話す姿勢・態度

誰でも話し始めは緊張する。事前に壇上に立って感覚をつかむようにする。マイクの有無もチェックしておくとうい。

壇上に立ったら軽く会釈をする。話し始める前に、少し見渡し、一呼吸置いて、やや大きめに話すとよい。終わりも、真ん中を見て、一呼吸とってから移動する。

#### 4.3 顔の表情・アイコンタクト

聞き手を引きつけるには、その人の目を見て話すことである。スピーチでは聴衆全体を前後左右4ブロックに分けるとよい。その4ブロックの方向にほぼ均等に視線を向ける。審査員の経験から

話せば、審査員の顔を時折見るのも極めて効果的である。

#### 4.4 ジェスチャー

審査員が日本人であるか、あるいは英語母語話者であるかによって印象が異なる。英語母語話者にジェスチャーの指導を依頼したことがある。母語話者のジェスチャーにあまりにも近づけたことによって日本人の審査員からは不評であった。

最近ではジェスチャーを多用する傾向にあり、内容に合わせて適宜に導入するとよいだろう。次に基本的なジェスチャーを挙げてみよう。

(1) Yes, No で首を動かす。

(2) 大きさや高さを手で表す。

I ate a thick steak there. It was about this size. と言いながら具体的に示す。

(3) 数を指で表す。

I have four brothers. と言いながら指を折る。ちなみに、英語では親指から小指に向かって順番に折って数える。

(4) 自分や相手を手のひらで指す。

指さしによって人の顔を指し示すことは攻撃的なポーズとみなされることがある。手のひらでならば差し支えない。

### 5. 指導の過程で心がけること

スピーチの指導では根気と忍耐が求められる。指導者も指導を受ける生徒も千差万別であるため、以下に挙げる方法がすべて得策とは言えないので取捨選択することになる。

#### 5.1 内容の理解

生徒が英語を流ちょうにしゃべってはいるが、本人が理解しているかどうか疑問を抱くことがある。本人が内容に納得していないことや十分に吟味していないこともある。内容に自分で納得していない場合は練習に身が入らない可能性がある。あるいは、あまりにも何度も練習したためにデリバリーが上滑りになっていることがある。このような場合、逆説的ではあるが、時には原稿を見ながら、(大雑把に) 日本語で練習してもよい。そうすることによって、内容を再確認することになる。

## 5.2 音読指導

発音については英語母語話者に原稿の英語を録音してもらい、その音声の後で繰り返したり、シャドウイングを実践させたりするとよい。最近では、英文をペーストすれば、英語母語話者に近い発音やイントネーションで読み上げるソフト (GlobalvoiceEnglish: Hoya 株式会社) もある。ただし、デリバリーまでは期待できないので一層の指導が必要である。高価なソフトではあるが、学校内で共有するとよい。

## 5.3 練習場所

様々な場所で練習させる。本番の会場に自由に出入りできればよいが、現実は無理であろう。会場の壇上に立った瞬間に舞い上がってしまう生徒も少なくない。筆者は生徒に多様な人の前はもちろんのこと、校長室・教室・職員室・グランドなどで練習させた記憶がある。新たな緊張感を経験させたり、練習がマンネリ化するのを防いだりする効果がある。

## 5.4 プラス・ワンの指導

肝要なのは、一気に教えないことである。あまりにも負荷をかけて、生徒の自信や意欲を失わせることは避けなければいけない。生徒のペースに合わせ、お互いに相談しながら進めることである。繰り返すことになるが、指導者側には根気と忍耐が必要不可欠である。

## 6. 教室での指導

スピーチコンテストでは選ばれた生徒しか経験できない。ここでは、生徒全員が教室で発表する場面を想定して、参加意識を高めることができるパブリックスピーキングの評価方法について述べる。

「聞くこと」「読むこと」「書くこと」は一斉に評価することが可能であるが、「話すこと」はどちらの領域も一筋縄ではいかない。特に「話すこと [発表]」において、発表者は真剣になるが、聞き手の注意が散漫になることが指摘されており、聞き手も巻き込む評価方法が課題になっている。

本欄では下記のような「生徒による評価シ-

ト」を考えてみた。安易に回答する可能性があるために、「どちらでもない」という評価項目は避けた。当然のことであるが、評価に参加する生徒にはあらかじめ用紙の記載内容を説明しておくとうよい。

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| 1. 発表者は原稿を読まずに話しましたか？ | 読みませんでした<br>ほとんど読まずに話しました<br>ほとんど読んでいました<br>ずーと読んでいました               |
| 2. 視覚資料を効果的に使っていましたか？ | 効果的でした<br>かなり効果的でした<br>あまり効果的ではありませんでした<br>まったく効果的ではありませんでした         |
| 3. はっきりと大きな声でしたか？     | はっきりとした声でした<br>かなりはっきりした声でした<br>あまりはっきりとしていませんでした<br>声が小さくて聞こえませんでした |
| 4. 聞き手を見て話していましたか？    | 十分に見ていました<br>かなり見ていました<br>あまり見ていませんでした<br>まったく見ていませんでした              |

目の前の生徒の様態に応じて、配点などの工夫を加えることになる。例えば、「はい」は5点、「ほとんど読まずに話した」は3点、「ほとんど読んでいた」などは2点とする。

なお、スピーチコンテストの場合は禁止されることが多いが、一般の授業では視覚資料を奨励するとよい。Show & Tellの実践の場にもなり、スピーチは円滑に進められる。

## 7. おわりに

それぞれのスピーチコンテストが終了すると、責任から解放されてほっとする。個人的なことになるが、会場を離れる前に審査用紙と審査結果を回収してもらっている。それでも帰途ではそれぞれの生徒の顔と声が走馬燈のように思い出される。

本稿では、生徒が英語のスピーチを磨くのに役

立つと思われる種々の指導技術を検討してきた。スピーチコンテストの結果は確かに重要であるが、究極的な目標は、練習を通して生徒を英語的にも人間的にも成長させるものと確信している。

**参考文献**

川村正樹（1999）『英語力向上のためのスピーチ学習

入門』リーベル出版

トミー植松（1986）『英語のスピーチ』創元社

トミー植松（1989）『応用のきく英語スピーチ活用集』  
研究社出版

トミー植松（1995）『英語スピーチ実例集』創元社

本多敏幸ほか（2001）『アクティブスピーチ』TDK コ  
ア

松本亨（1974）『英語演説—その原則と練習』英友社